

「農具と天気予報」(農業新聞・野良ばなし掲載) 平成14年4月4日

今年の桜は、記録づくめの早咲きで、一気に春が訪れた。

春の農作業が本番を迎え、農家が多忙な時期だ。

昨今話題の温暖化に伴い、これまでの気象の統計値を塗り替える気温の上昇や大都市周辺のゲリラ的豪雨は、農家経営や経済に大きな影響をもたらしている。

農家にとって、農作業の各時期と天気との関わりは深く、より一層、気象情報のウエイトが大きくなっている。

天候の見通しや平年値データなどを参考に、直接影響を与える気象予報と実況データを速やかに入手し、自分で判断する機会が増えてきた。

とりわけ、自分の田畑周辺の天気はもとより、競合産地の生育状況と天気のチェックをすることが重要だ。

気象の変化は農作業に影響すると同時に、市場への出荷量や価格に反映するからだ。

一方、天気は諺(ことわざ)にも多く引用されており、農作業のヒントとして知っておくと便利で役立つものがある。

「鍋の肌しめると雨」はその好例であろう。

鍋を鋤(すき)や鍬(くわ)に置き換えると、分かりやすい。

通常、金属製品である鋤・鍬などは、気温より低温で、表面が湿りやすい性質を持っている。

すなわち、これらの表面が湿るような時には、低気圧が近づいているサインと受け止めることができる。

やがて、雨となる確率が高まっているので、身近な農具である鋤や鍬に注意すると天気が分かり、農作業の管理ができるということなのだ。

太平洋沿岸地方の大気は、乾燥した冬場から春になると湿度が高くなる。

一般的に、日本列島の周辺で、低気圧が近づいてくると、南寄りの風が吹き、太平洋のたっぷりとした暖かく湿った空気を運んでくる。